

## 神によって創造されなかった「この世」

復活節第二主日（神の慈しみの主日）

復活節は神の深い慈しみを思い巡らす光を与えてくれます。聖パウロは、「イエスはわたしたちの罪のために死にわたされ、わたしたちが義とされるために復活させられたのです」（ロマ4・5）と言っています。この名言は新約聖書が言う救いを簡潔にまとめていると言えるでしょう。そこで「義とされる」とはどういうことでしょうか。わたくしごとで恐縮ですが、中学生のころ、イエズス会の学校では授業への遅刻はゆるされず、必ず罰せられることになっていました。例えば乗っていたバスが事故に遭った場合、その事故証明書を規律長に見せて初めて、遅刻は自分のせいではなく、とがめられる理由ではないことが認められたのです。このささやかな例で、パウロが言う「義とされる」ことの意味が助けられたでしょうか。信仰の光のもとで、自分は罪びとであると認めます。しかも、犯した罪は自分のせいではなかったとか、とがめられるはずはない、と神様に言えるような理由の一つもありません。ですが慈しみ深い神は、わたしたちの状態をよくご存じです。だからこそ、御子をわたしたちの罪のために死にわたされ、義とするために復活させてくださったのです。主を信じ、その復活を告白するならば、罪の代わりに義とされ、新しい創造が行われます。復活された主の命が注がれるからです。まさに復活節のメッセージは慈しみのメッセージと言えます。信仰によって神の聖性に与るので、心が開かれるのです。これは神様の不思議ななさり方です。21世紀前に、エルサレムで十字架につけられ、死んで葬られ、三日後に復活されたと考えられている一人のユダヤ人は、わたしたちの最高の恩人となりました。それによって、到底考えられないほどの人間同士の連帯性に目覚めさせられるのです。

すでに初代教会の時から、その信仰に関する種々の問いかけが起こりました。例えば「主が復活されたのを見ていないのに、どうして復活を信じることが出来ますか」と。福音書は様々な答えを出してくれます。一つは復活された主を見ても復活を信じないことです。エマオの弟子たちの話はその例です。他方、使徒たちは自分の目で復活された主を見ることが必要でした。それによって初めて、ガリラヤで教えられたイエスと復活されたイエスが同じ方である、と証しできたのです。信仰に関して宣教と関連性のある答えは、きょうの福音書に簡潔に示されています。つまり、信じることができるのは神からのたまものであり、使徒の証しによって主の復活を信じることができるのです。実際主を見ないで信じることのできる人は幸いです！一方、きょうの第二朗読のヨハネ第一の手紙は違う問題を取り扱っています。そこでは、信仰を生きることは、この世との戦いであると暗示されており、その戦いに勝利を収めなければなりません。ヨハネは「世に打ち勝つ勝利、それはわたしたちの信仰です」（一ヨハ5・4）と言っています。それについて考えてみましょう。

「世」と世界は、原文のギリシア語は同じでも、全く異なる意味を持っていることに気をつけてください。神に創造された世界は神の愛の贈り物ですが、「この世」はキリストの祈りから除外されています。主は「世のために祈りません」と言われます（ヨハ17・9参照）。主は愛する弟子のために祈りますが、「この世」は彼らを憎みます。主が世に属していないように、彼らも世に属していないからです（ヨハ17・14参照）。それに、主と弟子たちは御父を知っていますが、「この世」は御父を知りません。主は御父に向かって弟子たちが真理において聖とされることを願います。主ご自身は真理そのものです。しかし「この世」は、善いものであるかのように人間を欺く嘘で巧妙に暗躍し、真の命を殺す毒に満ちています。ついには人間を神とキリストに反逆する罪に引き込むのです。「この世」の一番根本的な嘘は、目に見えるこ

の世界しか存在しない、と思いきませることでしょう。その嘘に従えば、わたしたちの世界は膨大な牢屋になります。その最終の境界線は、墓にほかなりません。その牢屋の中で多くの物に心魅かれ、それらを手にするように誘（いざな）われます。そして手に入るとそれらの奴隷となります。それだけではありません。いかに多くの物を持っているかを人に認められようとし、自分を世界の中心であると思いきみ、人から敬われ、尊ばれることを何よりも大切な価値にします。これが「この世」の精神です。しかし、主イエスのみ前でその嘘はあばかれます。「退け、サタン。あなたの神である主を拝み、ただ主に仕えよ」（マタ4・10）。しかも「この世」は宗教を避けるわけではありません。「この世」はその精神が損なわれないかぎり、ミサもロザリオも巡礼をすることも認めるのです。そのために真の宗教が汚され、偽物にされます。真の宗教を損ねる力として、「この世」の精神ほど、ひどいものはないでしょう。その精神は、湿気のようにじわじわとあらゆる使徒職のグループ、すべての修道院、教皇庁にも入りこみます。ミサへの参加が社会的因習にすぎないものであるかぎり、使徒的活動が人から認められるためのものであるかぎり、わたしたちの生活は「この世」の世俗性に染まっていると言えるでしょう。

旧約の時代から、人間生活を兵役に譬える話があります（ヨブ7・1参照）。詩編においても、神の国は対立の中に実現していくという確信が表れています。その確信は新約聖書のところどころにこだましています。ヨハネの手紙には、敵だけではなく勝利を収める戦略も教えてくれます。すなわち、「この世」に対する勝利は信仰にあります。先に述べたように、「この世」の精神に従えば、世界は自らのうちに閉じ込められていて、最終の境界線は墓です。ですがわたしたちの信仰はその境界線を完璧に超えるのです。主イエスの墓は空っぽです。そこに究極的な命の展望が開かれます。この世にいる限り、常に途上にあり、来世の生活を生きるための準備を整えていきます。このように考えるなら、信仰は、この美しい世界を牢屋にするような不自由さから癒してくれるのは明らかです。また、墓が世界の最終の境界線であるということは、信仰の光の代わりに心にかかる重い影となり、信仰の命の代わりに一種の霊的なマヒ状態を生むでしょう。反対に、教会の教えや使徒たちの証しから受け入れる信仰は、永遠の生命に開かれた内なる地平をもたらします。これは、主イエスのご復活の朝、体験された喜びの映しと言えるでしょう。

一方、信仰による「この世」に対する勝利は、この世界で生きることに実りをもたらします。確かに多くの人文学者は、この世界における健全な生活は人間の品性を高める、と認めるでしょう。しかし信仰だけは、キリスト者の生活の崇高な意味を教えてくれます。すなわち、信仰生活は、復活された主を生活に映し出すことであり、この世界に、神の国がますます豊かな実りをもたらすように、神と協力するという意味を持っています。また、自分にその使命があるという意識は、たとえ困難があっても打ち勝つことができるという希望の備えになります。天国をこの世に到来させることは、神ご自身のみ業ですが、それを空しくするものは何ともありません。これは、主がこの世に打ち勝たれたという信頼に満ちた希望です。キリスト者の生活の原動力は、心に注がれた神の愛であり、その働きの結果、生活全体は聖霊の実りになっていきます。そうした豊かな意味は、聖霊とわたしたちとの共同芸術作品ともいえるべき、新しい心を造り出します。このように主は、この世に対するご自分の勝利をわたしたちのうちに継続されるのです。

J. E. Perez Valera S. J.